

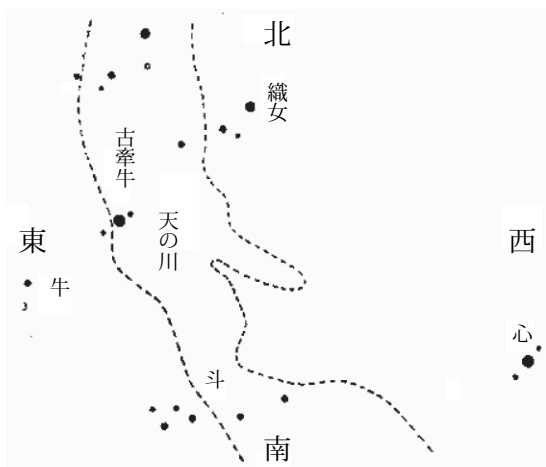
七夕物語

新城新蔵

伝説

牽牛織女の七夕物語は普く入口に膾炙して居る。夏の夕涼みがてらに仰いで大空を望めば、天頂を横ぎって南北に亘れる天の河の兩岸に接して目立ちて光って居る二つの大星がある。西北の方のは織女星で、東南の方は牽牛星である。頃しも陰曆七月七日の夕、上弦の月は丁度南方天の河の下流にかかつて居る。折柄飛び来れる鵲を以て橋となし天の河を渡つて、両星が相聚会すと見たのは、まことに自然的なるローマンスである。

このローマンスを歌つた詩や歌は和漢の文学を賑わして居り、この話に基いた七夕の星祭は、公けの儀式として、又民俗の行事として、近年に至るまでも行われて居つたのであるが、この物語は其伝来は頗る古く、その意味は頗る深長であるのでその来歴を尋ねれば、古代天文学の状況を察するに有力なる材料となすことを得べく、其精神を味え、これによりて東洋古代の文明の真相に接することが出来るであろうと思われ。



七夕物語の明記されて居るのは、西曆四世紀頃晋代の荆楚歲時記に

七月七日為_二牽牛織女聚會_一之夜_一

とあるのが最も古いらしいが、四庫全書總目提要の淮南子（西紀前百六十年前漢時代のもの）の部に

然白居易六帖、引_二烏鵲填河事_一云、出_二淮南子_一、而今本無_レ之、則尚有_二脱文_一也

とあり、又唐の韓鄂の歲華紀麗に

風俗通云、織女七夕当_二渡河_一使_レ鵲為_レ橋

とあり（風俗通義は後漢時代のもの、今の流布本には右の如き文なし）、又宋の鄭樵の天文略には

臣按、張衡云牽牛織女七月七日相見者即此也（張衡は後漢の人）

とあるのを以て見れば、この話が既に前漢時代にあつたことは確かであろう。なお漢代のものといわれて居る古詩に

迢_{ちやう}々牽牛星

皎_{きやう}々河漢女

織々擢_二素手_一

札々弄_二橫杼_一

終日不_レ成_レ章

泣涕零如_レ雨

河漢清且淺

相去復幾許

盈々一水間

脈々不_レ得_レ語

とあり、さかのぼ遡りては春秋時代の小雅大東に

維天有_レ漢

監亦有_レ光

跂彼織女

終日七襄

雖_二則_二七_一襄

不_レ成_二報_二章_一

皖_{かん}彼牽牛

不_二以_二服_二箱_一

とあり、又殷末周初のことを記せるものと思わるる夏小正に

七月、漢案戸、初昏織女正東郷

とあるのも何れも其話に係ある如く思わるるので、牽牛織女のローマンスは少くとも今より三千年前の周初の頃からあるものと思われる。

考証

非常に古い伝説なので、長き間の変運に就て詳細に調べて見れば、諸方面の参考に資すべきものが尠_{すく}なくない。第一には天の河を漢又は河漢、天漢などと称えて居ることである。漢というのは支那では漢水という楊子江の支流の名である。河に見立てることに不思議はないが、地上の漢水の名が先きで、天の河を漢に見立てたか、又は天

上の河を初めから漢と名けて居ったので、後に地上の方を漢水と称うるに至ったか。支那の文化が漢水地方に及んだのは比較的古くはないと思わるるので、先後の順序の研究が古代の文化状態に関し有力なる材料となるのであると思われる。

第二には、たなばたの牽牛星は、支那の天文書では河鼓と称えて居り牽牛なる名称は其南に当りて黄道二十八宿の一なる牛宿に与えて居ることである。たなばたの両星は物語の性質上、天の河の兩岸に接せる二つの大星であることは毫も疑うの余地がないので、この事實は、支那の星の名が七夕物語の出来た後の某時代に変じたということ、及び著しき星の名を變ずることは頗る混乱を起すものなるにも拘わらず、これを斷行せるには相當に重大なる理由があつたものと見なければならぬということを示して居るものである。

第三には、唐以後の文学の士の牽牛織女を歌える詩には凡て皆、牽牛を河の西とし、織女を河の東とし、東西相反して居るのは甚だ滑稽といわなければならぬ。

第四には七夕物語の精神と天文学の発達との關係は頗る意味深長である。

是等の諸項の中、第一に就ては私は未だ定説を持たない。或は七夕物語は漢水地方に起つたものと見るべきであるかも知れない、なお今後研究の機会を得たいと思つて居るのであるが、第二項以下に就ては次に一応の解説を試みて見たい。

牽牛と河鼓

支那の書物で恒星の位置を記載せる天文書の最も古きものは、紀元前百年頃に出来た史記の天官書であるが、これには「牽牛を犠牲となす。其北は河鼓、河鼓の大星は上將、左は左將、右は右將なり。婺女。其北は織女、織女は天女の孫なり」とあり、ここに牽牛と婺女とは黄道二十八宿の牛宿と女宿で、河鼓というて居るのはたなばたの牽

牛星のことである。更に紀元前三四百年頃の戦国時代に出来たと思われる爾雅の积天の部には、黄道十二次の一なる星紀に就て「星紀は斗牽牛なり」というて居り牽牛は明かに二十八宿の一なる牛宿を指して居るに拘かかわらず、其後の方に「河鼓之れを牽牛と謂う」というて居る。これは「河鼓のことも亦牽牛と称える」とか又は「河鼓は近頃まで牽牛と称えて居った」という程の意味であろうと思う。

是等の記録によつて見れば、たなばたの牽牛星を河鼓と称うるに至つたのは、天官書や爾雅よりは以前であるが、それより余り距へだたらぬ時代であろうと想像することが出来る。

この事は印度の二十八宿と支那の二十八宿とを比較研究するに当りて頗すこぶる重要な意義を有するものである。二十八宿というのは、黄道附近の著しき星を目印として、周天を二十七乃至二十八の宿に区分して、月の位置の変更を追跡するために設けたものであるが、印度のものも支那のものも、共に大体同様の星を選んで居るので、これは決して偶然に一致したのではなく、必ずや一方にて作りたる二十八宿が他に伝わったものであることは疑もないのであるが、其両者の相異なる点の主なるものは、印度の二十八宿の中には織女、牽牛を取り入れてあることである。この両星は共に黄道よりは可なり離れて居るので、特別の理由がなければ黄道二十八宿の中に取り入れらるる筈のものではないのである。

要するに牽牛織女の両星は黄道を距へだたること可なり遠いにも拘かかわらず、印度の二十八宿には現にこれを含んで居り支那の二十八宿も整理以前にはこれを含んで居つたと見るべきで、この事實は二十八宿の起原が牽牛織女の伝説の行われて居つた地方と密接の関係あることを暗示して居るものである。

思うに二十八宿は初め周初の頃に支那で案出されたものであり、当時支那では牽牛織女の物語が既に普あまねく人口に膾炙かいしゃして居り、両星は民俗的親みを持って居つたので、黄道を距ること少しく遠きに過ぐるにも拘かかわらず、これを二十八宿中に取り入れたので、印度へはこの古き形が其儘まま伝わりて今日に及び、支那では其後天文観測法の発達に

伴ない、余りに黄道より遠きものを存するのは不便なので、戦国時代頃に整理を試みたものであろう。其際に牽牛の代りに黄道方面に見立てたる星には牽牛の名を譲り、在来の古牽牛には多少縁故ある名称（多分ある地方に於ける名称）なる河鼓という名を附し、織女の代りに黄道方面に見立てたるものには、婺女ぶ又は須女（織女の下婢という意）という名を与え、在来のものには其儘織女ままの名を保有せしめて居ったものである。

斯の如くに考うれば、偶々たまたま七夕物語の存在して居るがために、支那の二十八宿は戦国時代に一度整理されたものであることが明かになるのであり、その整理の事実はや直ちに二十八宿の起原及び伝来に關し有力なる研究資料を提供して居るものである。

西と東

杜甫の詩に

牽牛出河西

織女処其東

万古永相望

七夕誰見同 云々

というて居るのは明かに西と東とを誤つて居る。この詩が先例になり唐以後の詩に歌えるものは悉く皆西と東とを誤つて居るのであるが、殊に甚だしいのは、事文類聚に引用せる焦林大斗記に

天河之西有星、煌々与参俱出、謂之牽牛、天河之東有星、微々在氏之下、謂之織女

とあるが、参と牽牛とは天の反対の方面にあるので、同時に見ゆることは殆ど無い、織女は氏の下の方などにはない。この焦林大斗記の如きは仮に論外としても、多くの人に吟詠さるべき詩の中に、誰でも一寸夏の夕の空を仰げば直

ちに明かなることを公々然と反対に歌つて居るのは、余りにひどいと思われるのであるが、斯の如き明白なる誤を生じた所以ゆえんを考うるに、恐らく二つの理由がある。

第一には文選に晋の陸機の詩

擬迢々牽牛星

昭々清漢輝

粲々光天步

牽牛西北廻

織女東南顧云々

というのがある。此詩の三四句の意味は牽牛が西北の方を、織女が東南の方を顧みて居るとも、又は牽牛は西北の方に、織女は東南の方に居るとも取れる。陸機の考では定めし夏小正に「織女正しく東嚮す」とある句を聯想して、織女は西北の方から東南の方を顧みて居るという積りであつたかも知れないが、この文選の詩が広く歌われて居る間に意味を反対に誤解され、杜甫に至りては明かに「牽牛河西に出て、織女、其東に処る」という様に動きの取れない誤に陥つたのではあるまいか、一度び杜甫ほどの大家に誤られて後は、凡ての文人が其鑿ひそみに倣ならうて、悉ことごとく同じ誤を継承するに至つたのも、支那の如き伝統を重んずる国に於ては免れ得なかつたことかも知れない。

第二には、空は一昼夜に一廻転するので、それ自身には方位が無い筈であるが、支那では便宜上、牛女の辺が地下に没し丁度正北に当る頃の位置を標準として黄道に東西南北の方位を附して居る。従つて夏の夕に南に向つて見るのとは正反対に、牛女に向つて右が東、左が西になつて居る。斯の如く夏の夕に現実に見た即景とは正反対になつて居るにも拘かかわらず、便宜上に設けた方位に従つて机上の想像で「牽牛河西に出づ」と詠んだかも知れない。

思うに右の二つの理由は相共に作用して居つたかも知れない。何れにしても現実を離れて余りに紙上の伝統に捉

われ過ぎた弊を暴露して居るので、ここにも不立文字を唱える必要がある。

現代天文学より見たる解釈

七夕物語が三千年来の古伝説なることを利用してこれを歴史的研究の資料とすることや、又は長き間の伝統が動もすれば陥り易き情弊を明かに暴露して居ることを指摘して文学の士の参考^{ひつぎょう}に供することなどは畢竟^{ひつぎょう}枝葉の問題である。我々は進んで根本的に素樸なる七夕物語の本来の精神を味つて見なければならぬ。

現代天文学の見るところによれば、空に見ゆる恒星は皆一つ一つ我が太陽と比類すべきものである。我が宇宙は斯の如き恒星が幾億乃至幾十億程相集りて成れるもので、是等の恒星は広袤^{こうぼう}幾万光年（光が通過するに一年を要する程の距離を一光年と称える）の間に扁平楕円体状に散布して居る。我が太陽はほぼ其中心に近き辺にあるので、扁平体の遠く拡がれる方面に望みたるものが即ち天の河で、天の河の光は畢竟^{ひつぎょう}微かに見ゆる星が遠くまで連りて其光の集積して見ゆるものに外ならぬ。要するに我が宇宙は天の河即ち銀河の方面に延びたる扁平体状の集団なので、これを銀河系とも称えて居る。我が太陽や牽牛星、織女星の如きも其実質に於ては天の河のぬか星と異なる所はないのであるが、偶々^{たまたま}我々に近きがために大きな太陽や又は大きな星となつて見えて居るのに過ぎない。

銀河系を成せる幾億の恒星は単に偶然相遇うて一時的の烏合集団を作つて居るのではない。恒星相互の間には強大なる引力が作用して居るので、これに依り永久崩れざる恒久的団体を成して居るのが我が銀河系である。

これを小にしては、我が太陽が其周囲に廻つて居る地球、火星、木星等の遊星や、多くの小遊星、彗星、流星群などと相集つて太陽系なる一の集団をなして居るのも亦全く相互引力のためで、これに依り永久崩れざる恒久的団体を成して居るのである。更に小にしては、我が地球が幾多の噴火や地震に遭つても崩れず、仮に混天魔王が金剛杵を以てこれを搗いても壊れざる一大塊をなして居るのも、亦全く相互引力のためである。

一言にしていえば、天地位を定め、日月星辰長えに天に輝いて居るのは、全く物質間相互引力のために外ならぬのであるが、銀河の兩岸に接して相對立せる二つの大星をして相引かしむる七夕物語は、畢竟宇宙成立のこの根本事実を表徴せるものと見るべきであろう。

天文学發達の歴史より見れば、其初めは四五千年の昔、農業文明の初期に当りて、四季の變化を示すよき曆を作ることの必要上から起つたもので、北斗や二十八宿などは此目的のために觀測されたものなのであるが、紀元前五六世紀頃に至りてはこの第一期の問題は漸く卒業し、孟子の所謂「千歳の日至も坐して致すべし」という確信を有する程になつたので、更に一步を進めて、一年の週期以上に、幾年幾十年乃至幾百年に亘る氣象の循環又は世運の隆替等を天文によりて知らんとして努力したのであるが、この問題は余りに困難なる若くは無理なる問題であつたので、遂に西洋方面では占星術、支那では五行説という様な邪道に陥るに至つたものである。牽牛織女の七夕物語はこの間にありて曆法のためでもなく、又星占のためでもなく、全く人情自然の發露として成れる美わしき物語であることは実に稀代の珍といわなければならぬ。

更に思うに、人間社会の成立も亦我が大宇宙の成立と相比較すべきものではなからうか。人間社会は決して単に幾億の人間が累々として相雜居せる烏合の集団ではない。古来幾多の民族的戦争や幾多の階級的闘争にも崩れず大魔王の悪戯にも壞れずして成立して居るのは、必ずや人間相互の同情仁愛の念が互に相引いて成立の根本要素をなして居るがために相違ない。

人の心を種として天上界のローマンスを組み立てるのも、星辰界の現象に基いて人心の趨く所を察するのも、畢竟歸する所は一である。七夕物語が三千年の壽命を有して今なお普く喧伝されて居る所以のものは、蓋し星辰界と人間界とを通じて其成立の根本の機微に觸れて居るがために外ならぬ。三千年の昔に斯の如き物語を有して居つたことは実に東洋文明の誇と謂わなければならぬ。

- 『宇宙大観』（一九二七年、岩波書店）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi}2\text{pdf}^{\text{m}}\text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。